

「第28回北方圏国際シンポジウム オホーツク海と流氷」に参加して

真野 修一 ・ 宮腰 靖之

平成25年2月17日から21日にかけて、紋別市で「第28回北方圏国際シンポジウム オホーツク海と流氷」が開催されました。このシンポジウムは流氷博士として知られ、昨年10月に亡くなった青田昌秋さんを中心として始まったそうです。現在はオホーツク海海氷研究グループと紋別市が主催し、子供や一般市民向けの催し物から、研究者による専門的な学術講演まで幅広い内容となっています。今回の日程、これまでのプログラムは<http://www.o-tower.co.jp/okhsympo/28Schedule-J.html>に載せられています。

このうち、学術分科会へは国内の大学や研究機関の他、韓国、ロシアから多くの研究者が参加していました。筆者は19日に設けられた「氷海の生物・水産」の中で発表しました。

真野の発表の概要は以下のとおりです。

題名：Relationship between density index of juveniles and total catch of Japanese smelt (*Hypomesus nipponensis*) in Lake Abashiri, Hokkaido, Japan

- ・北海道東部に位置する網走湖は道内でワカサギの漁獲量が最も多い湖である。
- ・網走湖に生息するワカサギの生活史は明らかにされており、漁業の他に穴釣りは冬の風物詩として市民にも利用されている。
- ・我々は様々な調査を行い、稚魚分布指数からその年の漁獲量を予測してきたが、近年、予測に対して漁獲量が少なくなっている。
- ・データを1999年までと2000年以降に分けると稚魚分布指数と漁獲量の相関係数は高くなった。
- ・網走湖は塩分が低く酸素が豊富な上層と、酸素がほとんどなく硫化水素を含む下層に分かれていて、その境界層深度は時期や年により大きく変動する。
- ・2000年以降、境界層は高い位置にあるといわれているが、それだけが稚魚分布指数に影響を与えているのかは不明であり、今後も調査や環境のモニタリングを継続していかなければならない。

宮腰の発表の概要は以下のとおりです。

題名：Effects of ocean conditions on returns of chum and pink salmon on the Okhotsk coast of eastern Hokkaido

- ・最近の北海道のサケの来遊数は海区によって傾向が異なり、オホーツクは高い資源水準の年が続いて

いる。カラフトマスは最近3年ほどの間に急激に減少している。

- ・オホーツク海沿岸の5～6月の沿岸水温は年によって異なり、サケ幼魚の沿岸での分布は水温に強く影響される。
- ・5月に海水温が低いとサケ稚魚の沿岸域における分布範囲は渚帯に限定され、6月下旬に海水温が高いとサケ稚魚の沿岸滞泳期間は短くなる。
- ・網走沿岸の海洋環境は宗谷暖流の影響を受け、海水温、出現するプランクトンも変わる。
- ・沿岸域でのモニタリング調査によるサケあるいはカラフトマスの稚魚の採集尾数と成魚の回帰数の間には弱い相関がみられている。
- ・最近では9月に海水温が非常に高く推移する年が多く、近年の高水温はサケの漁獲時期にも影響を与えている。

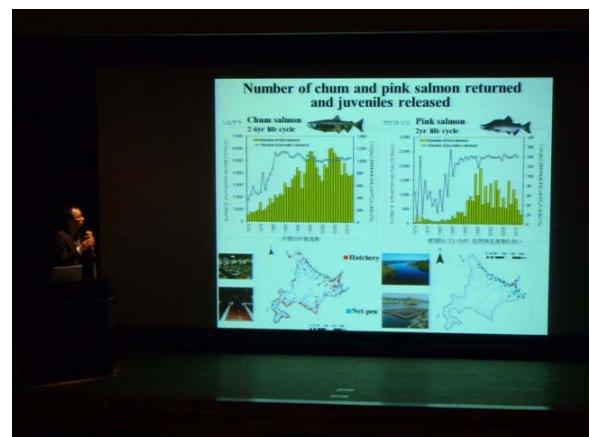


写真 宮腰の発表の様子

会場では外国人を含む20～30名の研究者が熱心に発表に耳を傾け、それぞれの発表の後には活発な議論がなされました。

また、このセッションの最後には、この春、東京農大を退官される谷口旭教授が“Why marine mammals are abundant in the north cold waters?”という演題で講演を行い、ご自身の長年にわたる海洋生物学の研究結果を踏まえて後輩研究者に向けたメッセージを込めた貴重なお話をされました。会場からの大きな拍手の中、この日のセッションは幕を下ろしました。

(まの しゅういち：道東内水面室研究主査)

(みやこし やすゆき：さけます資源部研究主幹)